

Title	出土古文献復原における字体分析の意義 : 上博楚簡の分篇および拼合・編聯を中心として
Author(s)	福田, 哲之
Citation	中国研究集刊. 2006, 41, p. 119-141
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/61123">https://doi.org/10.18910/61123</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 出土古文獻復原における字体分析の意義

—上博楚簡の分篇および拼合・編聯を中心として—

福田哲之

### 序言

近年、中国においては簡牘に書写された大量の古文獻が出土し、古代史学の諸分野に画期的な進展をもたらしている。出土古文獻の多くは、もともと複数の竹簡を横糸で編綴した冊書の形態をもつが、長い年月のうちに横糸が朽ち、各簡がバラバラになった状態で出土する。したがって、出土古文獻の研究においては、これらの竹簡をいかにして冊書に復原するかが最も重要な課題の一つとなっているのである。

本稿で取り上げる上海博物館戦国楚竹書(上博楚簡)は、上海博物館が一九九四年に香港の文物市場から購得

した竹簡一二〇〇余簡からなる八十余種の出土古文獻の総称である。これらは湖北省の楚墓から盗掘されたものであり、出土地については明らかにされていないが、書写年代は、炭素十四の測定と秦の白起による拔郢の年から、前三七三年〜前二七八年と推定されている。竹簡の図版・釈文を収録した馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書』(上海古籍出版社)の刊行が二〇〇一年より開始され、現在第五冊までが刊行されている。上博楚簡には、郭店楚簡や包山楚簡など他の戦国楚簡に比して、残缺した竹簡がきわめて多く、こうした状況は、盗掘とそれに伴う市場流出に起因するものと考えられる。したがって上博楚簡研究においては、大量の残簡を篇ごとに分類す

る分篇、断裂した残簡をもとの完全な竹簡に復原する併合、各簡の排列を復原する編聯といった冊書への復原作者業が、その基盤として重要な位置を占めているのである。

これら一連の復原作者業は、竹簡の形制・字体・語彙・文体・内容などを総合的に踏まえて行われるが、断片的な残簡においては情報量が限定されるため、竹簡の形制・語彙・文体・内容といった面から客観的な指標を得ることが難しく、強いて内容面の関連を優先させると、主観的な解釈に陥る結果となりかねない。こうした危険性を可能な限り回避し、正確な分篇にもとづく併合・編聯を試みる上で重視されるのが、残簡においてもより客観性の高い指標となり得る字体の分析である(注1)。

本稿ではこのような意図から、『内礼』附簡、『季康子問於孔子』簡16、『君子為礼』『弟子問』の三つの事例を取り上げ、出土古文獻復原における字体分析の意義を明らかにしてみたい。

## 一、『内礼』附簡

『内礼』(上海博物館藏戰國楚竹書(四))二〇〇四年)は『大戴礼記』曾子立孝篇・曾子事父母篇と共通する内容をもち、孝を中心とした礼にかかわる古佚文獻である。

篇名は簡1の背面に倒書された篇題「内豊」「豊」は「禮(礼)」の初文)により、完存する竹簡(完簡)四簡、断裂した残簡十簡の計十四簡が残存する(注2)。なおその後、林素清氏・井上亘氏によって、当初、別篇とされた『昔者君老』(上海博物館藏戰國楚竹書(二))二〇〇二年)四簡(完簡三簡、残簡一簡)が、『内礼』の一部であることが指摘されている(注3)。本稿も両氏の見解にしたがって『昔者君老』を『内礼』の一部として扱うが、論述の混乱を避けるため各篇の名称は従来そのままとした。

『内礼』において注意されるのは、上述の十四簡以外に分篇が留保された附簡一簡が存在する点である。附簡は簡長二十四・五センチ、下段のみの残簡で、釈文は以下の通りである(注4)。

□亡(無)難。母(毋)忘姑姊妹而遠敬之、則民有豊(禮)、然後奉之以中准(準)

『内礼』の「釈文考釈」を担当した李朝遠氏は、附簡について「此簡字体與本篇相同。曾將之與第八簡綴接、但文義不洽、且編綫不整。存此備考」と述べ、附簡の字体は本篇と同じであると、簡8との接続の可能性を指摘しながら(注5)、文義が合わず、編線も整合しないこと

から『内礼』への分篇を留保している。その後の研究においても、『内礼』の一部と見なして他の竹簡とともに検討する立場と、保留のまま他の竹簡のみを対象に検討する立場との二つに分かれるが(注8)、未だ附簡の分篇について定論をみるに至っていない。

そこで、あらためて附簡の字体を精査すると、風格面では『内礼』の他の竹簡と類似性が認められるものの、形体面においては「表一」に示したように「亡」「母」「而」「敬」「則」「民」「豊」「中」など、第三欄『内礼』附簡中の多くの文字が、第一欄『内礼』および第二欄『昔者君老』と相違し、附簡の字体は本篇と同じであるとすると李朝遠氏の見解は、首肯しがたいことが知られる。さらに上博楚簡の他の諸篇との比較分析を試みた結果、これらの形体はいずれも第四欄『季康子問於孔子』(『上海博物館藏戰國楚竹書(五)』二〇〇五年)と合致しており、李朝遠氏が疑点とした『内礼』附簡の編線(第二契口・第三契口)も『季康子問於孔子』とほぼ同位置にあることが判明する。すなわち、字体と形制との両面から、『内礼』附簡は『季康子問於孔子』に属することが指摘されるのである。

それでは、文義の面における両者の関連はどうであろうか。『季康子問於孔子』は、完簡八簡、残簡二十簡と約

七割を残簡が占めるため(注9)、内容を十分に把握し難い簡も多く、全体にわたる編聯の復原はきわめて困難な状況にある。今のところ『内礼』附簡との間に直接的な拼音を想定し得る残簡は見いだされないが、注目すべきは、以下に示すように附簡と『季康子問於孔子』簡5・簡12との間に「…而…之、則…有…」という共通の構文が認められる点である(傍線部参照)。

・ □□無難。毋忘姑姊妹而遠敬之、則民有禮。然後奉之以中準【附簡】

・ □面事皆得。其勸而強之、則邦有幹。動百姓尊之以

【季5】

・ □安焉。作而乘之、則邦有獲。先人之所善、亦善之、先人之所使【季12】

こうした構文の共通性は、附簡が『季康子問於孔子』の一部であることを文体の面から示唆するものと言えよう。『季康子問於孔子』における附簡の位置付けについては、これらを踏まえた全体的な検討が必要であるため、詳細な議論は別稿に譲るが(注8)、新たに附簡が加わることににより、編聯復原の進展が期待される。

〔表一〕 (注9)

則	敬	而	母	亡	
	<p>—</p>	 	 		<p>第一欄 『内礼』</p>
<p>—</p>		<p>—</p>			<p>第二欄 『昔者君老』</p>
					<p>第三欄 『内礼』附簡</p>
 			 		<p>第四欄 『季康子問於孔子』</p>

中	豊	民
—	—	—

以上本章では、『内礼』附簡について字体・形制・構文の三点から検討を加え、これらはいずれも『季康子問於孔子』との間に緊密な共通性を示すことを指摘し、『内礼』附簡は『季康子問於孔子』に分篇すべきことを明らかにした。

二、『季康子問於孔子』簡16








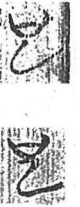

前章における『内礼』附簡の検討を通して、『内礼』『昔者君老』と『季康子問於孔子』との字体上の相違点が明瞭に把握された結果、新たに『季康子問於孔子』簡16の

分篇の問題が指摘される。簡16は簡長十四・八センチ、下段のみの残簡で、釈文は以下の通りである。

☐之必敬、如賓客之事也。君曰、薦豊(禮)

「表二」に示したように、第三欄『季康子問於孔子』簡16の「敬」「也」「豊」などの形体が第四欄『季康子問於孔子』の他の竹簡と異なり、第一欄『内礼』および第二欄『昔者君老』と合致する。すなわち『内礼』附簡の場合とは逆に、『季康子問於孔子』簡16は『内礼』『昔者君老』に属することが明らかとなるのである。

〔表二〕（注10）

豊	也	敬	
		—	第一欄 『内礼』
—	—		第二欄 『昔者君老』
			第三欄 『季康子問於孔子』簡16
			第四欄 『季康子問於孔子』

この字体分析の結果は、内容面からも明確に裏付けられる。文義・構文の検討により、『季康子問於孔子』簡16は『昔者君老』簡2（簡長二十二・六釐米、上端稍残、下端殘缺）に下接し、両者はもともと同一の竹簡であったことが判明する（後掲釈文参照）。なお『昔者君老』簡2と『季康子問於孔子』簡16とを合わせた簡長は三十七・

四センチ、これに対して『昔者君老』の完簡は簡長四十・二センチであることから、釈文中に「……」で示したごとく、『昔者君老』簡2と『季康子問於孔子』簡16との間にはなお六・八センチの缺失簡が存在する。

至命於閭門、以告寺人、寺人入告于君。君曰「召之」。

太子入見、如祭祀之事【也】【昔2】……之必敬、如賓客之事也。君曰「薦禮」。【季16】

以上の検討から、『季康子問於孔子』簡16は『内礼』篇において、老君に対する太子朝見の礼を述べた文脈に位置したことが明らかとなり、君主の言葉によって厳肅に進行される礼の次第がより明瞭に把握されるのである。

### 三、『君子為礼』『弟子問』

『君子為礼』『弟子問』は、『上海博物館藏戰國楚竹書(五)』において公表された佚書である。『君子為礼』は残存十六簡のうち完簡二簡、残簡十四簡であり、『弟子問』は残存二十五簡のすべてが残簡である。両者はともに孔子や弟子の問答を中心とし、内容面において類似性をもつ。「釈文考釈」を担当した張光裕氏は、

本篇與下一篇《弟子問》簡文內容性質相類、多屬孔門弟子與夫子之間問答、兩篇合共四十一簡、然殘闕仍多、彼此之間實在難以依序編連。經仔細分辨、並從竹簡切口位置・文字書寫風格及特徵審視、大致可區分為兩類、例如「而」「也」「子」「其」「章」諸字、無論運筆或形體、皆有其獨特寫法。今乃依據上述標準、並結合部分簡文內容、分為《君子為禮》及《弟

### 子問》兩篇。

と述べ、「竹簡切口位置」(契口)と「文字書寫風格及特徵」から兩篇に区分したことを明らかにし、とくに運筆や形体に特徴のある文字として「而」「也」「子」「其」「章」を指摘している(注1)。

『上海博物館藏戰國楚竹書(五)』の刊行後、釈読に関する多くの見解がインターネットを中心に提出されているが、とくに注目されるものに、陳劍「談談《上博(五)》的竹簡分篇・拼合与編聯問題」(簡帛網二〇〇六年二月十九日 <http://www.bsm.org.cn/>)がある。そのなかで陳氏は「三、《君子為礼》」の(三)において、以下のごとく釈文を提示している。

(三) 簡11 + 15 + 13 + 16 + 14 + 12可拼合・連讀、《弟子問》篇的簡22當次於其後。簡文如下、

行人子羽問於子貢曰、「仲尼與吾子產孰賢」子貢曰「夫子治十室之邑亦樂、治萬室之邦亦樂、然則【11】□矣」「與禹孰賢」子貢曰、「禹治天下之川、【15】□以為己名。夫【13】子治詩書、【16】亦以己名、然則賢於禹也」「與舜【14】孰賢」子貢曰、「舜君天下、【12】

□子聞之曰「賜不吾知也。夙興夜寐、以求聞【弟



## 子問 22

この陳氏の釈読については、冒頭部分を「行人」と釈して「子」を衍字とし、「子羽」を鄭の行人子羽（公孫揮）に比定する見解など、いずれも従うべき点が多いが、分篇・編聯の問題から注意を要するのは、簡12の後に『弟子問』簡22を位置付ける点である。その根拠について、陳氏は以下のごとく述べている。

《弟子問》簡22當是孔子在得知子貢與子羽的問答內容後、認爲子貢的回答不妥、子貢並不真正了解自己。  
《弟子問》簡22的保存狀況與前引本篇簡16相近、也  
有助於說明它們原本在一處。

すなわち『弟子問』簡22は、子羽と子貢との問答を知った孔子が、子貢の回答は不適切であり、子貢は自分（孔子）を本当に理解していないと述べた内容であるとし、その傍証として『弟子問』簡22の保存状態がその前の『君子為礼』簡16と近く、これらがもともと一箇所にあったと見なされることを指摘するのである。










『君子為礼』で展開される鄭の行人子羽と子貢との問答は、孔子と子産・禹・舜との優劣に関する内容であり、子羽が直接仕えた名宰相の子産（注12）、治水に功績があり

夏王朝を開いた禹、禹に禪讓した聖天子の舜と累進的に比較が行われている。竹簡の缺失により子産と舜の部分については内容を明確に把握し難いが、禹については天の河川を治めた禹に対して詩書を治めた孔子の優位が説かれている。子産については優劣を判定した最終部分を缺くが、判定の根拠は「夫子は十室の邑を治めて亦た樂し、万室の邦を治めて亦た樂し」と統治における「樂」が基準としてあげられている。「樂」を最上位に位置付ける思考は、例えば『論語』雍也篇の「子曰く、之を知る者は之を好む者に如かず。之を好む者は之を樂しむ者に如かず」という孔子の発言にも明瞭に示されており、統治を樂しんだ孔子が子産よりも優れているとの結論が導かれていたことは容易に推測される。そしてこうした子産や禹の議論を踏まえれば、舜についても同様に孔子の方が賢であるとの結論であった可能性が高いであろう（注13）。

このように、子羽と子貢との一連の問答は、孔子が子産・禹・舜のだれよりも賢であることを説く内容であったと考えられる。ところが、陳劍氏の見解に従い、この後に『弟子問』簡22「……子之を聞きて曰く、賜吾を知らざるなり。夙に興き夜に寐ね、以て求聞……」との孔子の言が存在したとすれば、子貢の主張は孔子自身によ

って批判されるといふ構成であったことになり、この章段の意図は子産・禹・舜に対する孔子の優位を説くものではなく、逆に師を誇らんとするあまり不遜な言辞を弄した子貢に対して、孔子の謙讓を示すものであった可能性が生ずる。したがって『弟子問』簡22の拼合は、この章段の内容理解を左右するきわめて重要な意味をもつと

〔表三〕 (注14)

不	子	也	
			<p>第一欄 『君子為礼』</p>
			<p>第二欄 『弟子問』簡22</p>
			<p>第三欄 『弟子問』</p>

言えるのである。

それでは『弟子問』簡22の拼合の妥当性について、字体の面から検証してみよう(〔表三〕参照)。まず指摘されるのは、『弟子問』簡22に張光裕氏が『君子為礼』と『弟子問』とを区分する指標とした文字の中の「也」「子」字が見いだされる点である。

このうち「子」字には、第二画の縦画が第一欄『君子為礼』では直線的であるのに対し、第三欄『弟子問』では曲線的であるといった筆法上の傾向性が看取される。

第二欄『弟子問』簡22の「子」字はやや不鮮明ながら曲線的な筆画を有しており、『君子為礼』に比して『弟子問』との間に共通性を認めることができる。ただし「子」字については、『君子為礼』と『弟子問』との間に形体上の差異は認められず、個別的にみるとかなり接近した例も見いだされるため、単独では判別基準として十分に機能したい面が残ることも考慮しておく必要がある。

これに対して「也」字については、最終の筆画が第一欄『君子為礼』は左斜め下で一旦筆を止めて右上に曲線的に大きく折り返した形体、第三欄『弟子問』はそのまま右斜め下に引き下ろした形体と明瞭な相違が認められ、第二欄『弟子問』簡22は『弟子問』の他の諸簡と合致している(注15)。

このように『弟子問』簡22の「子」「也」字はいずれも『弟子問』の他の諸簡と合致し、『君子為礼』と相違することが確認されるわけであるが、ここでさらに両者の分篇に有効な常用字の例として「不」字を指摘してきた(「表三」参照)。楚簡文字の「不」字の縦の筆画には通常必要とされない裝飾的な一画(点)が付加される例が

多見され、この飾画が第一欄『君子為礼』では横画、第三欄『弟子問』では円点と明瞭に相違している。そして第二欄『弟子問』簡22の「不」字も「子」「也」字と同様、『弟子問』の他の諸簡と合致するのである。

「也」「子」「不」字の出現状況を『君子為礼』『弟子問』の簡ごとに整理すると「表四」のごとくであり、他方の筆法・形体が混用される例は一例も見いだされない。こうした複数の文字における筆法・形体の一貫した相違は、『君子為礼』と『弟子問』との書写者が異なることを示唆するものと言えよう(注16)。

そしてさらに重要な点は、張光裕氏が指摘するように、これらの字体の相違が完簡および残存簡(「表四」)「竹簡(残存契口)「欄参照」から計測される契口位置の相違とも対応している点である(注17)。こうした状況は、これらの字体と契口位置との間に明瞭な対応関係が存在し、それは同じ字体でありながら欠損により契口位置を特定しがたい残簡についても適用し得ることを示している。すなわち、『君子為礼』と『弟子問』とに認められる字体および契口位置の相違は、両篇が筆者を異にした別個の冊書であることを物語っているのである。

以上の検討により、『君子為礼』の子羽と子貢との問答の後に孔子が子貢を批判する『弟子問』簡22が接続した

との陳劍氏の見解は、成立しがたいことが明らかとなる。

〔表四〕

『君子為礼』


簡16	0	1	0	上下端皆残(不明)
簡15	0	1	0	上下端皆残(第二?)
簡14	1	0	0	上端残、下端平齐(第三)
簡13	0	0	0	上下端皆残(不明)
簡12	0	1	0	上端平齐、下端残(第二)
簡11	0	6	0	上端平齐、下端残(第一・第二・第三)
簡10	0	0	0	上下端皆残(第一?)
簡9	3	0	0	上端平齐、下端残(第一・第二・第三)
簡8	0	0	0	上下端皆残(不明)
簡7	0	0	0	上下端皆残(第一・第二)
簡6	0	0	0	上端残、下端平齐(第二・第三)
簡5	0	0	0	上端平齐、下端残(第二)
簡4	1	1	0	上端残、下端平齐(第三)
簡3	2	3	2	完簡(第一・第二・第三)
簡2	3	0	4	上端平齐、下端残(第一・第二・第三)
簡1	1	3	2	完簡(第一・第二・第三)
	也	子	不	竹簡(残存契口)

## 『弟子問』

簡19	2	0	0	0	0	0	0	2	1	1	2	1	0	0	1	3	0	1	1	也
簡18	3	0	1	1	0	3	2	2	2	0	1	1	0	1	2	3	0	2	1	子
簡17	0	1	0	0	1	0	2	0	0	0	0	1	0	2	2	0	0	1	0	不
簡16	上下端皆殘(第二)																			
簡15	上端殘、下端平齊(第三)																			
簡14	上端殘、下端平齊(第三)																			
簡13	上端平齊、下端殘(第二)																			
簡12	上下端皆殘(第二?)																			
簡11	上下端皆殘(第二?)																			
簡10	上端殘、下端平齊(第二・第三)																			
簡9	上下端皆殘(第二?)																			
簡8	上端殘、下端平齊(第二・第三)																			
簡7	上下端皆殘(不明)																			
簡6	上端殘、下端平齊(第二・第三)																			
簡5	上端殘、下端平齊(第二・第三)																			
簡4	上端殘、下端平齊(第二・第三)																			
簡3	上端平齊、下端殘(第一)																			
簡2	上端平齊、下端殘(第二)																			
簡1	上下端皆殘(第二?)																			
	竹簡(殘存契口)																			

附簡	簡24	簡23	簡22	簡21	簡20
1	1	0	1	0	0
0	0	1	1	0	1
1	0	1	1	0	0
上端残、下端平齐 (不明) (注19)	上端残、下端平齐 (不明)	上下端皆残 (不明)	上端残、下端平齐 (不明) (注18)	上端平齐、下端残 (不明)	上下端皆残 (不明)

【表五】 (注20)

不	第一欄	第二欄	第三欄
	『君子為礼』	『弟子問』簡18	『弟子問』

陳劍氏は、さらに以下のごとく『君子為礼』簡10と『弟子問』簡18との併合を指摘している。

另外、本篇簡10也有可能當與《弟子問》篇的簡22 (注21) 相併合、附記於此、

□昔者仲尼緘(？)徒三人、弟徒五人、芻過之徒【10】者、皆可以爲諸侯相矣。東西南北、不奇□【弟子問18】

しかしこの点についても、「表五」に示したごとく、第

二欄『弟子問』簡18の「不」字に、上述した第一欄『君子為礼』と相違し第三欄『弟子問』と共通する円点の飾画が見いだされることから、同様に冊書を異にする『君子為礼』簡10(注23)との併合には従いがたい。

孔子と子産・禹・舜との優劣をめぐる子羽と子貢との問答がいかなる帰結であったかについては、缺失により明らかにし得ないが、この問題に関連して注意されるのは、先に陳剣氏が『弟子問』簡18との接続を指摘した『君子為礼』簡10に「仲尼」の呼称が見いだされる点である。

『君子為礼』の残存十六簡における孔子の呼称をみると、地の文ではすべて「夫子」であり(簡1・簡3)、問答中においても孔門弟子である顔淵(簡3・簡4)、子貢(簡11・簡13+16)はいずれも「夫子」と称している。すなわち『君子為礼』において「仲尼」の呼称を用いるのは、簡11の子羽の発言と簡10のみに限定されるのである。こうした状況は、逆に簡11の子羽が孔門弟子以外の人物であることを示すものであり、呼称の観点からも子羽を孔門弟子の子羽(澹臺滅明)とする張光裕氏の見解は首肯しがたく、鄭の行人子羽(公孫揮)に比定する陳剣氏の見解の妥当性が裏付けられる。そして簡10についても「仲尼」の呼称の存在から、地の文ではなく孔門弟子以外の人物の発言の一部であるとの推定が可能と

なる。

ここで簡10を除く『君子為礼』の残存十五簡の内容についてみると、以下のごとく四組に分類される(数字は竹簡番号)。

(I) 顔淵と孔子との礼の実践にかかわる問答(簡1+2: +3墨鉤前)

(II) 顔淵と孔子との独知・独貴・独富についての問答(簡3墨鉤後+9A+: +4: +9B)(注23)

(III) 礼の具体的な実践方法(簡5+6・簡7A・簡7B+8)(注24)

(IV) 行人子羽と子貢との孔子と子産・禹・舜との優劣についての問答(簡11: +: 15+13+16+14+12)

このうち(I)と(II)とは連続するが、全体構成における(I)(II)と(III)と(IV)との前後関係は不明である。仮に『君子為礼』がこの四組の内容で構成されていたとすれば、現存簡にみえる登場人物で「仲尼」の呼称を用いることができるのは、(IV)の子羽のみであり、完存する簡11の簡首「行人子羽問於子貢曰」が(IV)の冒頭にあたりと見なされることから、簡10は子貢の発言に対する子羽のコメントの一部であった可能性が指摘

される。ただし『君子為礼』には多くの缺失簡が存在するため、残存する四組以外に別の問答が含まれていたとの推測も成り立つことから、簡10は缺失した問答における孔門弟子以外の人物の発言の一部であった可能性も考慮しておく必要がある。

簡10は文意を把握しがたく、『君子為礼』において他の諸簡との関連や位置づけが明らかにされていない唯一の残簡であるが、上述の検討によって、不十分ながら釈読に一定の方向性を見いだし得るのではないかと思われる。

これまで陳劍氏の見解に対して、張光裕氏の分篇の妥当性を検証してきたわけであるが、最後に『君子為礼』と『弟子問』との分篇の問題について、『弟子問』簡3を取り上げてみたい。

『弟子問』簡3は、簡長十二センチ、上端平斉、下端残の残簡で、釈文は以下の通りである。

毋又(有)柔孝(教)、毋又(有)首猷、植(直)□

このうち『弟子問』簡3と『君子為礼』および『弟子問』の他の諸簡との比較が可能な「毋(母)」「子(偏旁)」「又」「植」の四字について分析を加えてみよう〔表六〕

参照)。

まず「毋」についてみると、第一欄『君子為礼』には第一画の収筆を右側に顕著に巻き込む特徴をもった例が散見され(註5)、第二欄『弟子問』簡3はこれらと合致して第三欄『弟子問』の他の諸簡と異なっている。

「子」字の相違についてはすでに上述したとおりであるが、第三欄『弟子問』にみえる「季」字の偏旁の「子」字は『弟子問』の「子」字と同様、第二画の縦画を曲線的に作り、一貫した筆法であることが確認される。ところが、第二欄『弟子問』簡3「季(教)」字の偏旁の「子」字は第二画を直線的に作っており、『弟子問』の「子」字と筆法を異にし、逆に『君子為礼』の「子」字と合致している(「子」字の用例については「表三」「表四」参照)。

「又」「植」字については『君子為礼』に用例が見えないため、第二欄『弟子問』簡3と第三欄『弟子問』の他の諸簡との比較となるが、『弟子問』簡3の「又」字は、「ㄷ」の角度が水平に近い曲線、収筆が緩やかな曲線となるのに対し、『弟子問』の他の諸簡はいずれも「ㄷ」の角度が直角に近く、収筆がほぼ垂直に下ろされるという顕著な共通性を示し、両者は明確に筆法を異にしている。また「植」字では、第二欄『弟子問』簡3が上部「直」字の第一画を横画に作るのに対し、第三欄『弟子問』で



〔表六〕（注26）

植	又	(偏旁) 子	母	
—	—	—		第一欄 『君子為礼』
				第二欄 『弟子問』簡3
				第三欄 『弟子問』

は円点に作って点画の形体を異にする。この相違は上述した『君子為礼』が「不」字の飾筆を横画に作るのに対し、『弟子問』が円点に作るのに対応しており、間接的なから『弟子問』簡3と『君子為礼』との共通性を示すも

のと見なされる。  
『弟子問』簡3では、明瞭な判別基準となる文字がみられず、三者相互に比較可能な文字(単字)が「母」字に限られるため、慎重な検討を要するが、上述した諸点を

総合的に踏まえることによつて、『弟子問』簡3は『君子為礼』中の竹簡であつた可能性が指摘される。

以上の字体分析の結果は、契口位置の分析から有力な証左を得ることができる。草野友子氏は『弟子問』の頂端から第一契口までの距離が、簡3では十・四センチであるのに対して、簡13では十五・〇センチと相違するため、第一契口の位置を確定し得ないことを指摘している〔注27〕。先の字体分析の結果を踏まえれば、草野氏が指摘する契口位置の相違は、簡3が実は『君子為礼』に属する竹簡であることに起因するものと考えられる。そして『君子為礼』の頂端から第一契口までの距離は十・五センチであり、『弟子問』簡3の十・四センチとほぼ同位置にあることから、先の字体分析の結果が裏付けられ、『弟子問』簡3は『君子為礼』中に分篇すべきことが明らかとなるのである。

さらに文体の面から注目されるのは、『弟子問』第3簡には「母有□」という禁止条項を提示する形式がみられる点である。これと類似した文体は、以下のごとく『君子為礼』の(Ⅲ)簡5+6・簡7Aにも認めることができる。

好。凡色母憂・母佻・母作・母譎・母【5】昞視・

母側曠。凡目母遊、定視是求。母欽母去、聲之疾徐、稱其衆寡【6】

□噍而秀。啓母廢・母痾、身母偃・母靜、行母眊・母擗、足母墜・母□□【7A】

『弟子問』簡3の「母有□」は(Ⅲ)にみえる「母□」とやや表現が異なる点を考慮しておく必要があるが、その内容は柔弱な教えや首謀となることを禁ずるものであり、禁止条項の提示という形式面における共通性を踏まえるならば、『弟子問』簡3は(Ⅲ)に列挙された礼の実践方法の一部であつた可能が指摘される。

#### 結語

以上、『内礼』附簡、『季康子問於孔子』簡16、『君子為礼』『弟子問』の三つの事例を中心に、出土古文献復原における字体分析の意義について考察を加えた。字体分析は出土古文献研究の基盤をなすものであり、とくに断片的な残簡の分篇を検討する際、有効性の高い研究方法のひとつとして位置付けられる。本稿の検討を通して、『上海博物館藏戰國楚竹書』の分篇の妥当性や保留とされた残簡の分篇の究明、さらに新たに提起された拼音・

編聯の検証などの諸点で、字体分析が重要な拠り所となることを具体的に提示し得たのではないかと思われる。本年九月六日に上海博物館において濮茅左氏からお聞きした情報によれば、当初全六冊の予定であった『上海博物館藏戰國楚竹書』は冊数が加増され(全冊数は未定)、最終冊にはもっぱら断簡が収録されることである。これらの断簡の精緻な字体分析によって、冊書復原の一段の進展が期待されよう。

## 注

- (1) 同一冊書の編聯復原における字体分析の有効性については、拙稿『語叢三』の再検討―竹簡の分類と排列―(浅野裕一編『古代思想史と郭店楚簡』〈第三部、第一章〉汲古書院、二〇〇五年)参照。なおこの論文は補訂を加えて、小著『中國出土古文獻與戰國文字之研究』(佐藤將之・王綏雯訳(萬巻樓圖書股份有限公司、二〇〇五年)に収録した。(2) 完簡1・2・3・10 残簡4A・4B・5・6A・6B・7A・7B・8A・8B・9 (ABは併合簡を示す)
- (3) 林素清「『釈』「匱」―兼及『内礼』新釈と重編」(『中国文字学的方法与实践国際學術研討会』提出論文、シカゴ大学・二〇〇五年五月二十八日(三十日)・「上博四『内礼』篇重

探」(出土簡帛文献与古代學術国際研討会)提出論文、国立政治大学・二〇〇五年十二月二日(三日)、井上亘「『内豊』篇与『昔者君老』篇的編聯問題」(簡帛研究網二〇〇五年十月十六日 <http://www.jianbo.org/>)

(4) 以下、本稿に掲げる上博楚簡の釈文は、先行研究を踏まえ、部分的に私見を加えて作成したものであり、印刷の便宜上、一部に通行の文字を用いた。

(5) ただし、簡8は上下兩段を綴合した完簡であり、附簡は下段のみの残簡であるため、李朝遠氏が指摘するような簡8と附簡との「綴接」は想定し難い。あるいは簡8は、簡9の誤りではないかと思われる。簡9は『内礼』において上段のみを存する唯一の残簡であり、少なくとも竹簡の残存状況という点からすれば、簡9の下に約三センチの缺失を含んで附簡が接続するとの想定は可能である。

(6) 附簡を『内礼』の一部とみる立場として林素清氏の見解、保留する立場として井上亘氏の見解が挙げられる(前掲注3参照)。なお、林氏は簡9の後に附簡を併合する(中間に缺失を含む)が、その根拠については明らかにされていない。

(7) 濮茅左氏の「釈文考釈」によれば『季康子問於孔子』本篇の竹簡は二十三簡。完簡八簡(簡1・3・4・7・14・19・21・23)、綴合後完整簡四簡(簡10・15・18・22)、綴合後不完整簡一簡(簡11)、上段缺失下段残存簡九簡(簡

2・6・8・9・12・13・16・17・21)、中段残存簡一節(簡

5)。このように濮氏は上下二段の残簡の綴合を試みているが、その中にはなお異論のある簡も含まれているため、ここでは綴合前の状態に復して、完簡・残簡の簡数を示した。

- (8) 本号掲載の拙稿「上博楚簡『季康子問於孔子』の編聯と構成」参照。なおこの論文は「新出楚簡國際學術研討会」(武漢大学・二〇〇六年六月二十六日―二十八日)に提出した拙稿「上博五『季康子問於孔子』的編聯與結構」にもとづく邦文である。

(9) 各文字の用例については、末尾「別表1」参照。

(10) 各文字の用例については、末尾「別表2」参照。

(11) 各文字の形体および比較については、草野友子『上海博物館藏戦国楚竹書(五)』について「形制一覽と所収文献提要一」(『中国研究集刊』第四十号、二〇〇六年)参照。

(12) 『左伝』襄公二十四年には、陳への進攻に対する鄭伯の賞賜(六邑)を辞退し、三邑を受けた子産について「公孫揮曰、子産其將知政矣。襄不失禮」と子羽(公孫揮)が評価した発言が記されており、襄公三十一年には子産の政権における子羽の役割について「子産之從政也、擇能而使之。……公孫揮能知四國之爲、而辨於其大夫之族姓班位貴賤能否、而又善爲辭令。……鄭國將諸侯之事、子産之間四國之爲於子羽、且使多爲辭令」との記述が見える。これらによれば子

羽は人物評価にすぐれ、諸国の情報通として知られた人物であり、子羽が子貢に孔子の賢者としての度合いを質問するという『君子為礼』の場面設定は、外交にたずさわる子羽の行為として現実感を伴うものであったと推測される。ただし、陳劍氏も指摘するように、子産・子羽は時代的に孔子や子貢に先行するため、この説話を歴史上の事実と見なすことは困難である。おそらく近接した時代であったために、大きな時代錯誤としては認識されなかったであろう。こうした状況は一方において、この説話の虚構性を端的に示しており、子羽と子貢との時代差に対する認識が稀薄であることを踏まえるならば、その成立は比較的後起に属すると見なすことができよう。

(13) 『君子為礼』の内容および思想的意義については、本号掲載の浅野裕一「上博楚簡『君子為礼』と孔子素王説」参照。

(14) 「表三」に掲げた各文字の図版の竹簡番号は、以下の通りである。各篇の竹簡全体の用例については「表四」参照。

「也」……『君子為礼』簡3、『弟子問』簡4

「子」……『君子為礼』簡11、『弟子問』簡8

「不」……『君子為礼』簡2(二例)、『弟子問』簡13

(15) 図版によれば『弟子問』簡22は竹簡の損傷が激しく、竹の繊維が解れて浮き上がった状態となっている。そのため

「也」字についても右斜め下に引き下ろした墨線の一部が浮き上がって上に折り返したように見えるが、これは実際の点画とは認められない。

(16) さらに『君子為礼』と『弟子問』との間には、前者が比較的肥瘦差の少ない線条的な点画を中心とするのに対し、後者は毛筆の弾力を生かした紡錘型の点画を中心とするといった、書風にかかわる点画構造の相違が認められる。『君子為礼』と『弟子問』との書写者が異なることは、こうした書風の相違からも裏付けられる。

(17) 張光裕氏の「釈文考釈」によれば、『君子為礼』の完簡の簡長は五十四・一〇五十四・五センチの間、第一契口から頂端までの距離は十・五センチ、第一契口から第二契口までの距離は十三・二センチ、第二契口から第三契口までの距離は十九・五センチ、第三契口から尾端までの距離は十・三センチである。一方『弟子問』については、すべてが残簡であるためか、契口位置の数値は示されていない。草野友子氏（前掲注11）によれば、『弟子問』の頂端から第一契口までの距離は簡によって契口の位置にずれがあるため確定し得ないが、第二契口から第三契口までの距離は十八・二センチ、第三契口から尾端までの距離は九・四〇九・五センチであるという。草野氏の数値は原寸図版にもとづく測定と見なされ、なお若干の誤差を考慮する必要があるが、

第二契口および第三契口の数値によって『君子為礼』と『弟子問』とが契口位置を異にする個別の冊書であることは十分に裏付けられる。

(18) 『弟子問』簡22は、上端残、下端平斉であるが竹簡の繊維がほぐれて残存状態がよくないため、図版によって契口位置を明瞭に把握することは困難である。

(19) 『弟子問』附簡は文字が薄く不鮮明であるが、簡中にみえる「也」字および「不」字はいずれも『弟子問』の字体と合致するようであり、『弟子問』に属する可能性は高いと考えられる。

(20) 「表五」に掲げた図版の竹簡番号は、以下の通りである。各篇の竹簡全体の用例については「表四」参照。

「不」……『君子為礼』簡2（二例）、『弟子問』簡6

(21) 陳劍氏は「簡22」とするが、その直後に掲げられた釈文から「簡18」の誤りと見なされる。

(22) 『君子為礼』簡10の分篇についての異論はみられないが、その妥当性は『君子為礼』簡11にみえる「中尼」の字体が完全に符合する点、点画の構造（書風）が共通する点、第一契口の位置が合致する点などによって明確に裏付けられる。

(23) (II) の併合・編聯は、陳劍「談談《上博五》的竹簡分篇・併合与編聯問題」、陳偉《君子為礼》9号簡的綴合問題（簡

帛網二〇〇六年三月六日 <http://www.bsm.org.cn/> の見解に従う。

値の提示を望みたい。

(24) (Ⅲ) の拼合は、陳劍「談談《上博(五)》的竹簡分篇・拼合与編聯問題」、劉洪濤「談上海博物館藏戰國竹書《君子為札》的拼合問題」(帛網二〇〇六年九月二日 <http://www.bsm.org.cn/>) の見解に従う。

(25) 同様な状況はほぼ同じ形体をもつ「女(汝)」字においても指摘される。

(26) 各文字の用例については、末尾「別表3」参照。

(27) 前掲注17参照。なお筆者の分析によれば、附簡を含めた『弟子問』残存二十五簡のうち、上端平斉の竹簡は簡2・簡3・簡13・簡19・簡21の五簡であり、簡21の第一契口の位置は、図版からは明瞭に確認しがたい。草野氏は簡2・簡19の契口については言及していないが、簡2は「民」字と「也」字との間、簡19は「唐(丞)」字と「子」字との間にそれらしき痕跡を認め得るようである。ただし仮にそうであれば、簡2は九・二センチ、簡19は十七・八センチといずれとも相違し、『弟子問』の第一契口の位置はさらに確定困難となる。『弟子問』の竹簡断裂の状況や他の簡における第一契口の位置の傾向性から、簡2の九・二センチの可能性が考慮されるが、あくまでも臆測の域を出ない。『弟子問』の契口位置については、ぜひとも原簡による精確な数

[付記一] 本稿の第一章・第二章は、先に発表した拙稿「上博四《内礼》附簡・上博五《季康子問於孔子》第十六簡の帰属問題」(帛網二〇〇六年三月七日 <http://www.bsm.org.cn/>) にあづかる。

[付記二] 本稿は、平成十八年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) 「戦国楚簡の総合的研究」(研究代表者・湯浅邦弘 教授(大阪大学)) による研究成果の一部である。

〔別表1〕算用数字は竹簡番号、右肩に\*を付した数字は表に掲げた図版の竹簡を示す。また、一字に二つの字体が見える場合は、上に掲げた字体をa、下に掲げた字体をbとして区別した。

中	豊	民	則	敬	而	母	亡	
* 7	* 1	* 10	6 * 10	—	a * 6 ・ b * 6 7	a * 6 7 8 9 ・ b * 6	* 6	『内礼』
—	—	—	—	4 *	—	* 1	* 4	『昔者君老』
/	/	/	/	/	/	/	/	『内礼』附簡
a * 3 ・ b 4 * 9	* 17	a * 3 21 ・ b 4 * 9 11 15 18 19 23	a 4 8 * 12 20 ・ b * 9 10 13 18 20	* 3	4 12 13 15 17 18 * 19 23	a * 7 11 19 22 ・ b * 17	* 10	『季康子問於孔子』

〔別表2〕算用数字は竹簡番号、右肩に\*を付した数字は表に掲げた図版の竹簡を示す。また、一字に二つの字体が見える場合は、上に掲げた字体をa、下に掲げた字体をbとして区別した。

豊	也	敬	
* 1	* 6 10	—	『内 礼』
—	—	* 4	『昔者君老』
/	/	/	『季康子問於孔子』簡16
* 17	a 10 * 18 · b 6 * 7 8 11	* 3	『季康子問於孔子』

〔別表3〕算用数字は竹簡番号、右肩に\*を付した数字は表に掲げた図版の竹簡を示す。

植	又	子 (偏旁)	母	
—	—	—	2 5 6 * 7	『君子為礼』
/	/	/	/	『弟子問』簡3
* 20	13 * 14 20	1 * 2 (季)	7 * 8	『弟子問』